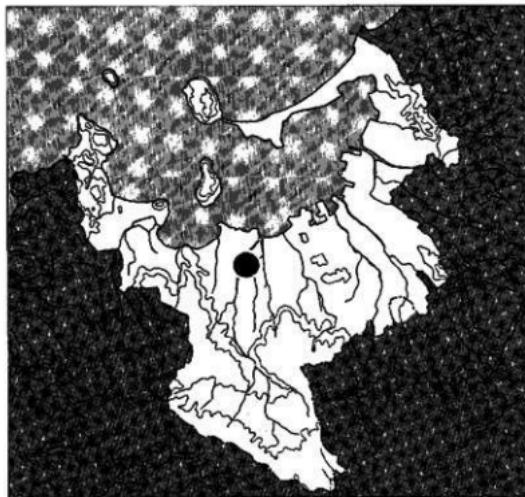


福岡市
有田・小田部
第25集
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第472集

1996
福岡市教育委員会

福岡市
有田・小田部

第25集
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第472集



1996
福岡市教育委員会

序

有田遺跡は、早良平野にあって、先土器時代以降、連綿として人々の生活の痕跡がたどれる数少ない遺跡の一つです。このたび、その第172次地点の発掘調査報告書を刊行することとなりました。平成5年度に実施いたしました発掘調査から、整理、報告業務まで円滑に進行させることができましたことは、ひとえに関係各位のご理解とご協力の賜物と考え、感謝し申し上げます。さらに本書が、有田・小田部地域のみならず、さらに広い視点に立つ歴史を考える上で、ささやかながらも資するところがあれば幸いです。

平成8年3月29日

福岡市教育委員会
教育長 尾花 剛

はじめに

1. 本書は、上村建設株式会社の委託により、福岡市教育委員会が平成5年度事業として、福岡市小田部五丁目61において実施した、有田遺跡群第172次発掘調査の成果報告書である。
2. 調査は、教育委員会文化財部埋蔵文化財課が行なった。
3. 発掘調査の実施に際して、地権者毛利義祐氏、委託者上村建設株式会社からの種々ご協力頂いた。記して感謝申し上げる。
4. 図1は、国土地理院発行の5万分の1地形図、「福岡」を使用した。
5. 現場作業、整理・報告作業は、埋蔵文化財課杉山富雄が担当した。
6. 出土資料、調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・管理する。

凡 例

1. 位置の記録には、『西区小田部・有田地区遺跡測量成果表(1980年)』の成果を利用し、報告上では国土地標上の位置と標高とにより表示した。
2. 報告中では、遺物、遺構にたいして調査中の記録、整理作業に際して付した通し番号により表記した。収蔵記録についても使用する。記録中、遺物注記についても同様である。遺構に対しては記号「M」を、遺物に対しては記号「R」を付している。
3. 図中に用いる方位は、国土地標の座標北であり、真北から0度19分西偏している。
4. 遺構図中、特に説明の無い場合トーンは以下の事を示している。

- ……………貼 床
- ……………柱痕跡

本文目次

1 有田遺跡とその調査	
有田遺跡の位置	1
有田遺跡第172次地点の位置	1
2 有田遺跡第172次調査の経過	
発掘調査に至る経過	3
発掘調査の実施	3
3 有田遺跡第172次発掘調査の成果	
成果の概要	5
土層 遺構確認面 遺構	
竪穴住居4(図6~10)	6
竪穴住居8(図11~14)	9
竪穴住居2(図15~16)	11
竪穴住居3(図18~21)	12
竪穴住居5(図23~26)	15
竪穴住居6(図27~29~31)	17
竪穴住居7(図32~33~35~37)	20
遺構185(図38~39)	23
掘立柱建物90(図40~42)	23
掘立柱建物100(図44)	25
掘立柱建物110(図46~47)	25
土壤9(図48~50)	26
他遺構出土遺物	27
4 おわりに	28

図 目 次

図1 有出遺跡群の位置(1/50,000).....1	図26 壊穴住居5(掘型 東から).....16
図2 第172次地点の位置(1/1,000).....2	図27 壊穴住居6(床面・掘型 1/60).....17
図3 有田172次地点遺跡全景(北から).....3	図28 壊穴住居6出土遺物(1/3).....18
図4 有田173次地点遺跡全体遺構図(1/200).....4	図29 壊穴住居6(床面 南から).....18
図5 調査区西辺部の遺構(北から).....5	図30 壊穴住居6(掘型 北から).....19
図6 壊穴住居4全体図(1/60).....6	図31 窯60(南から).....19
図7 壊穴住居4内柱穴十層断面図(1/40).....6	図32 壊穴住居7実測図(床面・掘型 1/60).....20
図8 壊穴住居4(東から).....7	図33 窯113実測図(1/40).....20
図9 土壙53(壊穴住居4)東から.....7	図34 壊穴住居7出土遺物実測図(1/3,1/2).....21
図10 壊穴住居4出土遺物実測図(1/4,1/2).....8	図35 壊穴住居(床面・貼床断面 南から).....21
図11 壊穴住居8実測図(1/60).....9	図36 壊穴住居7(掘型 西から).....22
図12 壊穴住居内土壙・柱穴土層実測図(1/40).....9	図37 窯113(南から).....22
図13 壊穴住居8出土遺物実測図 (1/4,1/2,2/3).....9	図38 遺構185(東から).....22
図14 壊穴住居8(西から).....10	図39 遺構185実測図(1/40).....23
図15 壊穴住居2(北から).....10	図40 掘立柱建物90(北から).....23
図16 壊穴住居2実測図(床面・掘型 1/60).....11	図41 掘立柱建物90実測図(1/60).....24
図17 壊穴住居2出土遺物実測図(1/4).....11	図42 掘立柱建物90柱穴土層断面図(1/40).....24
図18 壊穴住居3実測図(1/60).....12	図43 掘立柱建物90出土遺物実測図(1/3).....24
図19 窯40実測図(1/40).....13	図44 掘立柱建物100実測図(1/60).....25
図20 壊穴住居3(北から).....13	図45 掘立柱建物100出土遺物実測図(1/4).....25
図21 窯40(西から).....14	図46 掘立柱建物110実測図(1/60).....25
図22 壊穴住居3出土遺物実測図(1/4,1/3).....14	図47 掘立柱建物110(南から).....26
図23 壊穴住居5実測図(床面・掘型 1/60).....15	図48 土壙9実測図(1/40).....26
図24 壊穴住居5出土遺物実測図(1/3).....15	図49 土壙9出土遺物実測図(1/3).....26
図25 壊穴住居5(床面 東から).....16	図50 土壙9(北から).....27
	図51 土壙9出土遺物実測図(1/4,1/3,1/2).....27

1. 有田遺跡とその調査

有田遺跡の位置 有田・小田部の台地は、早良平野中央部に位置する須玖火山灰の浸食残丘である。台地は、浸食により、室見川上流側から海側へ向かって複雑な八つ手状に広がった地形として残っている。この地形を中心として広がる遺跡のまとまりを、有田遺跡群と呼称している。

有田・小田部の台地では、1960年代の後半期に区画整理が行われ、それに伴う発掘調査が実施されて、以後に続く緊急調査の嚆矢となった。特に1977年以降、発掘調査は本格化し、1995(平成7)年度にその調査は、180地点に亘っている。

有田第172次地点の位置 本書で報告する第172次地点は、有田・小田部の台地上で、その中央よりやや海側(北)に寄った位置の、台地が八つ手状に分岐するその付け根といえる部分に立地している。区画整理前の地形をしめす図幅によれば、調査区東半部が、周辺では最も高い尾根線上に位置し、西辺部は水田となっていた、台地間の谷へ向かう緩斜面に位置していたことが推測できる。

第172次地点周辺の調査 第172次地点を中心とした半径100mの範囲では、過去に第4次調査を初めとして10地点について発掘調査が実施されている。周辺地について、既存調査の概要を下表に示す。



図1 有田遺跡群の位置 (1/50,000)

調査番号	調査	所在地	調査面積 (m ²)	調査期間	出土遺構概要	調査報告書
7710	4次	小田部二丁目159	1,691	1977年6月9日～8月19日	奈良時代以降の掘立柱建物、製瓦場	
7825	11次	小田部二丁目312	67	1978年5月26日～6月2日	(磨製石器)	
8110	48次	小田部二丁目140	458	1981年5月18日～6月10日	弥生時代の竪穴住居、掘立柱建物、集落系、古墳時代の竪穴住居、中世の掘立柱建物。	第110集
8112	50次	小田部三丁目6-2外	125	1981年6月10日～17日	中世の溝、井戸。	第337集
8208	67次	小田部一丁目171外	685	1982年5月25日～6月18日	古墳時代の竪穴住居、古墳時代～平安時代の掘立柱建物、奈良時代の製鉄遺構。	第337集
8308	80次	小田部一丁目168	764	1983年6月22日～7月26日		
8419	93次	小田部三丁目401	54	1984年5月11日～5月23日	溝、小穴	
8424	98次	小田部五丁目44	257	1984年12月19日～28日	上棧、小穴	第139集
8651	114次	小田部五丁目51-2外	888	1986年12月14日～1987年1月26日	弥生時代の竪穴住居、古墳時代の竪穴住居、掘立柱遺構。	第308集
9106	166次	小田部五丁目5-39外	409	1991年4月23日～5月28日	古代から中世の掘立柱建物	

表1 第172次地点周辺の調査

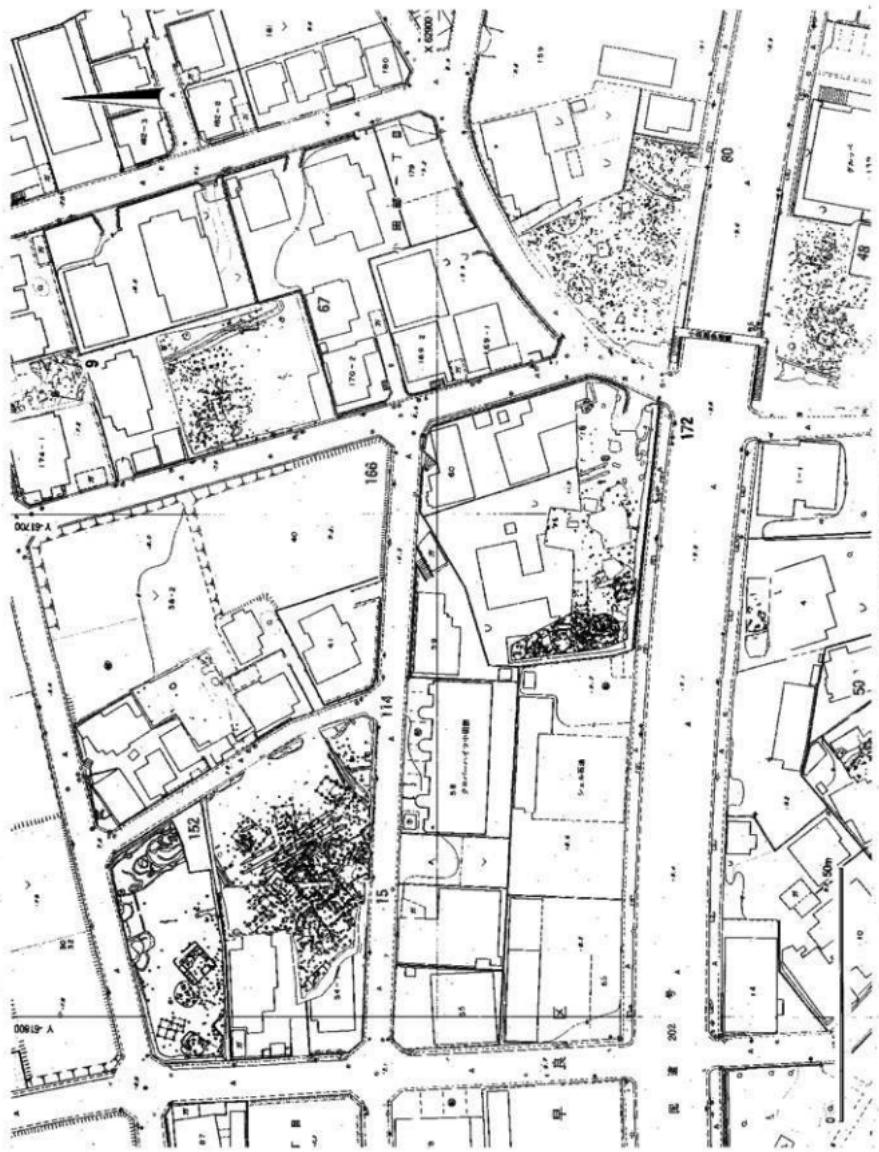


図2 第172大地点の位置 (1/1,000)

2. 第172次調査の経過

発掘調査に至る経過 調査地は、早良区小田部五丁目61番地に所在する。1993(平成4)年12月、地権者毛利義祐氏より、教育委員会埋蔵文化財課へ事前審査願が提出された。これを受け、埋蔵文化財事前審査班が、対象地の試掘調査を実施。埋蔵文化財が包蔵されていることおよび、その内容についての確認をおこなった。試掘調査の結果をもとに保存のための協議をもったが、計画される建築物が地下へ影響を与えるものであることから、やむなく記録保存の為の発掘調査を実施することとし、それについての協力をあおいだ。結果、地権者、施工者の全面的な協力を得ることができ、1993(平成5)年度、受託調査として発掘調査を実施することができた。

発掘調査の実施 発掘調査は、1993(平成5)年8月23日、機力による表土剥ぎから着手した。調査は、対象地のうち、予定される建物により破壊される部分について実施することとした。着手後、設計変更のあることがわかり、一部調査区を拡張し調査をすすめた。

調査地は、現況が宅地となって住宅が建っていたため、その基礎、あるいは配管さらに建物の除却に際しての掘り込みなどによる擾乱が各所に残されていた。とくに東半部は植木の移植のために大きく破壊されていた。ただし、この部分については遺構密度がごく薄かったのは幸いである。遺構の掘りあけ、記録を終え、埋め戻し等現場での作業を完了したのは同10月16日である。

発掘調査は、対象地1,822m²のうち、南半部の建物部分のみについて実施したことで、調査面積717m²について実施したこととなる。



図3 有田172次地点遺跡全景(北から)

圖 4 有田173地點遺跡余體遺構圖 (1/200)



3. 有田遺跡群第172次発掘調査の成果

成果の概要

土層 調査地は、宅地ということで、表土は固く締まっていたが、全体としては薄く、特に東半部では、0.1m程の厚さである。但し、緩斜面にかかる西辺部では厚く、最も厚い調査区南西隅部では、盛土もあって0.6m程の厚さがある。盛土下には黒褐色のクロボク様の土層があり、ここでは0.2m程の厚さをもって広がっている。

斜面部の小穴群 この黒褐色土層は、緩斜面部に広がっている。その広がりに重なるように、不整な形状の小穴が密に分布している。

遺構確認面 遺構確認面は地山である鳥栖ローム層となる。鳥栖ロームは、粘土質の部分を欠いているが、一部に円碟を含んでいる場所がある。確認のため深掘りをおこなったが、明らかな人為物の出土はなかった。

遺構 地山面で検出したほかに竪穴住居覆土に切り込んだ遺構があることが遺物の出土状況からわかるが、目視による観察では調査中にその形状規模を確認することはできなかった。遺構は調査区西半部に濃く、東半部ではごく薄く分布している。擾乱は各所にあり、広い面積を占めるものもあったが、機力により振りあげ、遺構の遺存の確認を行なうよう努めた。また、小穴、土壤には、近世あるいはそれ以前と考えられるものが多いが、それは覆土の状況からするもので、実際遺物の出土により確認できるものは多くない。

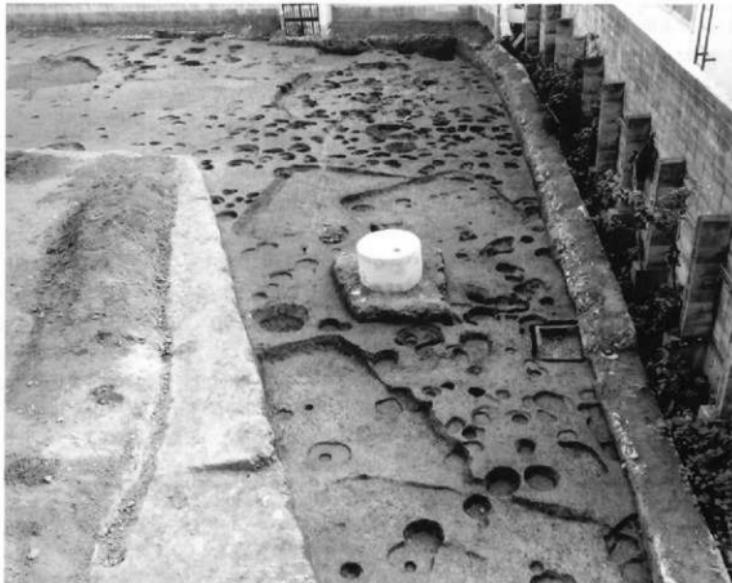


図5 調査区西辺部の遺構(北から)

結果として、弥生時代の竪穴住居2、古墳時代後期の縦穴住居5、時期は不明であるが、方形状の遺構1、古墳時代の掘立柱建物2、中世の可能性がある掘立柱建物1、平安時代の可能性がある土壙1を確認したほかに、柱穴、小穴を調査したことになる。柱穴とする遺構は、掘立柱建物を構成する可能性を考えて、調査現場、整理中の図上で検討を行ったが、今回報告する以上を復原することができなかった。

出土遺物 今回調査で出土した遺物の総量は収納用コンテナにして、6箱程の分量となる。

以下、個別遺構と遺物について報告する。

竪穴住居4(図6~10)

調査区西南部で検出した。円形の竪穴住居で、西向きの緩斜面に位置するために、西側の壁は痕跡程度の遺存である。覆土は、遺構の位置する緩斜面に堆積した黒褐色土と区別できない。壁面に沿い、また床面に先述の不整な小穴が多く、壁の状況が把握できない部分がある。住居の北側壁から東側壁にかけて壁溝を検出した。住居中央には、土壙がある。中央の長径0.6m、深さ0.4mの不整な橢円形

状の土壙で、周囲に小穴が取り囲むように分布している。これらは周辺の小穴とは明らかに異なり深い。一連の土壙と小穴とを遺構58とした。住居内の位置から炉の可能性を考えたが、焼土などは観察できなかった。

底面の深さから、壁面にかかる小穴、床面の小穴の多くを除外し、残る確実な遺構のうち、竪穴住居4の柱穴として遺構159、162、176、177を考

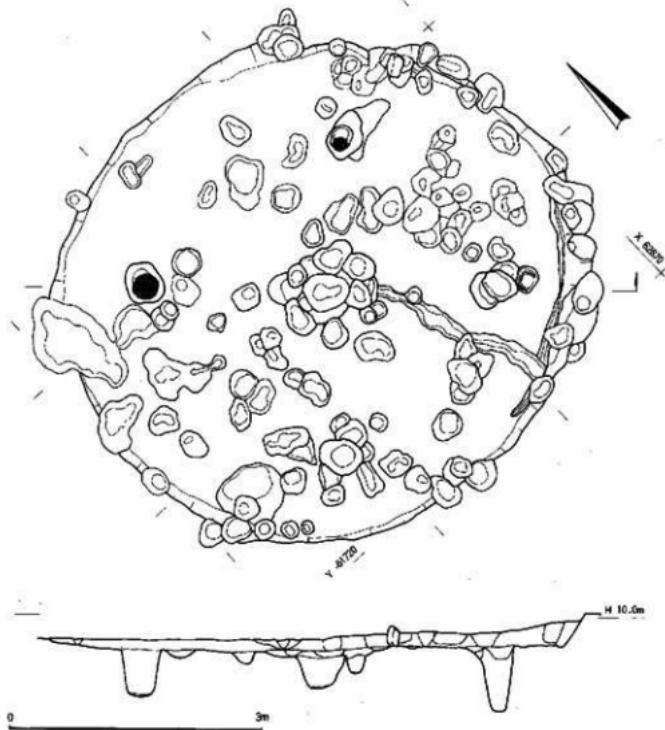


図6 竪穴住居4全体図(1/60)



図7 竪穴住居4内柱穴土層断面図(1/40)



図8 壑穴住居4(東から)



図9 土壌53(壻穴住居4)東から

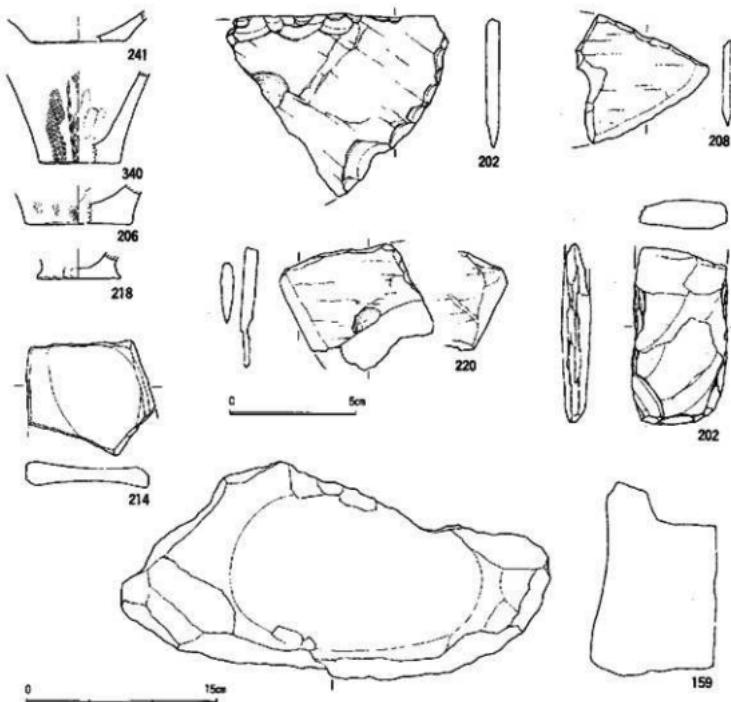


図10 穫穴住居4出土遺物実測図(1/4,1/2)

えることができる。柱穴159、同162については土層断面で柱痕跡を確認した。以上のことから、竪穴住居4は、中央に土壠をもち、4本柱の構造をとる円形住居を復原しておく。その規模は、径6m、深さは東側で0.3m、西側では0.1m未満となる。

出土遺物 遺物は覆土中から散漫に出土した。壁際の小穴に沿うようにして出土した石皿を除いて総量で大ボリュームの分量が出土している。柱穴からは、極少量が出土した。弥生土器の細片・小破片が多くを占める。

241は底底部の細片で、胎土に粗粒砂を多く含み、器表はにぶい橙色を呈す。器表の剥落が顕著である。206・340は底底部の小破片である。何れも胎土には粗粒砂を多く含み、内面はにぶい黄褐色を呈す。206は被熱よるものか外面が赤化して明赤褐色を呈す。340の外面はにぶい黄褐色を呈す。218は、底底部である。胎土に粗粒砂を多く含み内面黒色、外面にぶい橙色を呈す。縄文時代晩期とできようか。

202・208・220は石包丁で、泥岩製。破片資料である。208・220は刃縁を研磨しているが、202は加撃による調整のままである。202・220では、回転による穿孔途中の段階にあり、径の大きな穿孔具の痕跡が擂鉢状に、片面に残されている。極薄く或いは片面が剥落しているものかもしれない。

203は打製石斧である。刃部(図上の上端)を欠く資料である。側面は打ち潰し状を呈す。泥岩製。

214・219は石皿であろうか。214は板状で、表面が浅く窪む。断面図の周囲が擦り向となっている。159は大形でかつ厚い。不整で長い砂岩の角砾の一面に浅い梢円形状の窪みが生、この面は全面擦面となっている。159は長さ35cmを測る。

豊穴住居 8 (図11~14)

調査区中央南辺部で検出した。豊穴住居7、掘立柱建物90構成柱穴と重複することもある、床面の大部分は不明確である。壁の立ち上がりが僅かの部分残っていたことで、それと判断した。床とする一部に焼土塊が検出された。遺存する部分の壁から平面形を復原し、それに含まれる範囲の遺構を検討すると、住居4と同様、住居中央に土壙59を、柱穴の可能性を遺構70・118に考えたい。但し、土壙59のは、その断面形状も非常に不整である。

出土遺物 遺物は覆土中から

追溝59



柱穴118



図12 豊穴住居内土壙・柱穴上層実測図(1/40)
1.褐色褐色土(Brownish yellow loam)
2.ロームブロック (Loam block)
3.粘土層 (Clay layer) 地下水位よりローム層が侵食されたようすの状態。

0 1m

0 10cm

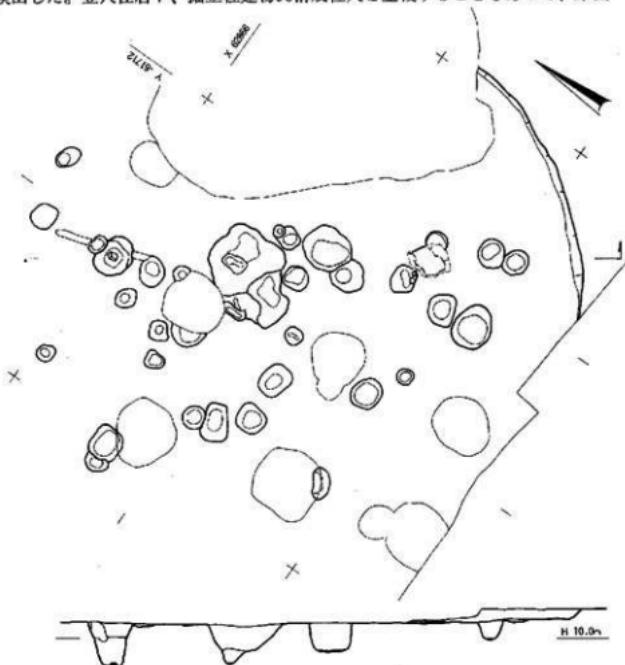


図11 豊穴住居 8 実測図(1/60)

散漫に出土した。総量で中ボリ袋程の分量である。弥生土器の細片、小破片が殆どである。238は弥生土器壺の細片である。胎土に粗粒砂を含み器表が鱗片状に剥落する。外面の荒れが著しい。内面は浅黄褐色を呈す。236は石核である。黒曜石製で、分厚い剥片を素材としている。11

は剥片鐵である。黒曜石を素材とする。
先端の一部を欠く資料である。

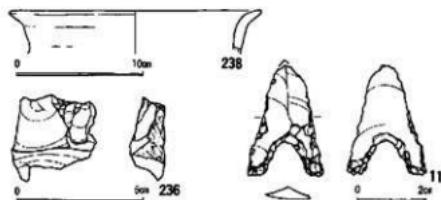


図13 豊穴住居 8 出土遺物実測図(1/4, 1/2, 2/3)

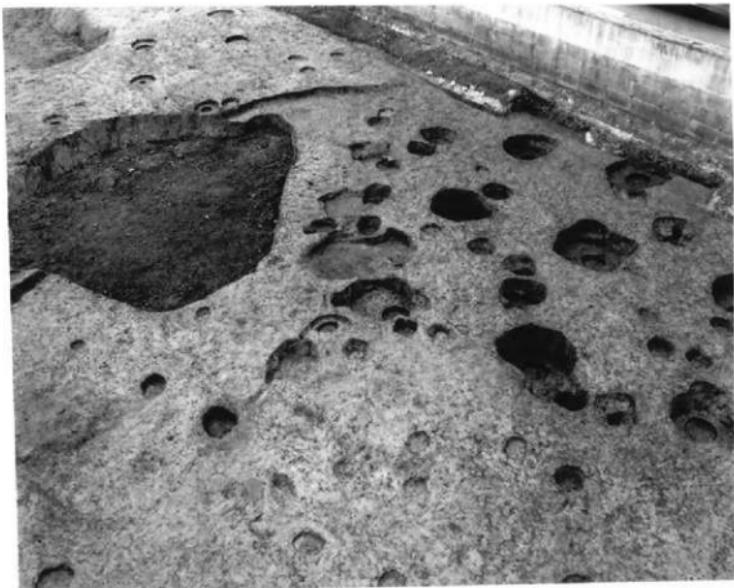


図14 壁穴住居 8 (西から)



図15 壁穴住居 2 (北から)

豊穴住居 2 (図15・16)

調査区北西隅で検出した隅丸の四辺形の豊穴住居である。豊穴住居5と重複してそれよりも新しい。西側部分と北側の部分とが調査区外にあり、全体の形状は確認できない。北側壁に設置されていると予想できる竈の状況等は不明である。最も良く遺存する部分で、床面からの壁の高さ0.1m程度であり、西側の部分は、削られて傾斜面となっている。床面を検出した段階で、南東隅部に塗跡を検出した。床面で痕跡を検出できた柱とそうでない柱とがある。床は、貼床が行われており、それの検出の過程で残る柱の痕跡を確認した。柱を建てたのちに貼床が完了したことが、柱痕跡の検出状況からわかる。貼床は住居隅部を中心にその部分の窪みを埋めるような形でおこなわれている。特に南東部隅のそれは、豊穴住居5の竈を完全に破壊してしまっている。

柱穴は、断面漏斗状を呈し、何れも柱痕跡が明瞭に認められる。4本柱で、柱の配置は長方形を成し、南北間の柱間隔が東西間のそれより0.2m前後長い。柱穴埋土は地山ローラムブロックを多くもちいている。柱穴がすべて確認できたことを利用して、柱間の中央で折り返して全体の形状を復原してみると、南壁と北壁間の距離3.7mを推測することができる。

出土遺物(図17) 遺物は覆土中から散漫に出土した。土師器等の細片が殆どである。総量で中ボリ袋程の量である。叩き目調整のおこなわれた土師器体部細片が顕著である。



図17 豊穴住居2 出土遺物実測図(1/4)

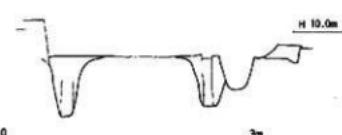
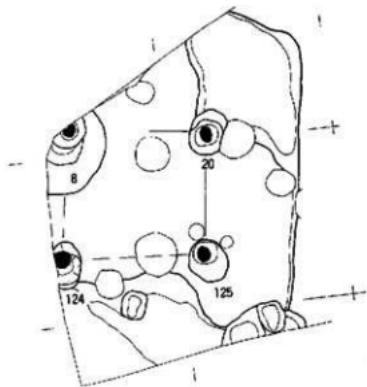
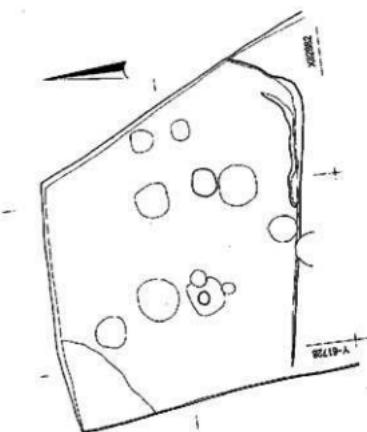


図16 豊穴住居2 実測図(床面・掘型 1/60)

187は酸化炎焼成による須恵器である。細片の資料で、胎土はやや砂質、内外面とも荒れて器表が剥落している。橙色を呈す。復原口径は11.8cmを測る。183は土師器高杯の坏部の細片資料で

ある。胎土に粗粒砂を含み、内外面とも器表が荒れている。明赤褐色を呈す。

竪穴住居3(図18~21)

調査区西辺部で検出した。竪穴住居6と重複してそれよりも後の住居である。隅丸方形の住居であるが、北西の隅部が壠である。壠(40)を北東に面する壁に作り付ける。覆土は暗赤褐色土である。壠を通る軸線上で3.2m、それと直交して3.0mを測る。床面で壠のほかに、その右側隅に、土壙126を検出した。壠前面には、焼土混りの土層が広がる。床面は貼床がされ、そのための掘型は、壠部分、その右側の住居隅部、壠と対する壁に沿う溝状の部分を特に深く掘る。壠の下では、壠より広い部分を深さ0.1mの不整な形状に埋め、地山土で埋める。掘型でも柱穴を検出できなかった。更に深掘りをしてみたが確認できなかった。住居壁際、壁外についても検討したがそれと考えられるような柱穴等はない。

壠40 崩落し、検出時は全体としてローム混りの高まりとなっていた。崩落、流出した部分を除去すると、袖部が遺存していることが分かった。構築材料は、地山土を主に用いているので、確認が難し。結果として、燃焼部の幅、0.6m、奥行き0.5m、焚口部の幅0.3m程の規模をもったものと観察された。燃焼部の中央には、地山ローム塊が被熱した状態で残り、その上から被熱した土師器が破片で出土した。被熱部分はほかに壠袖部でも確認でき、あるいはこれが支脚の用を成していたものかとも考えられよう。

出土遺物 遺物は覆土中から散漫に出土したほかに、壠40内部、土壙126中から土器が、完形あるいは大破片の資料として、出土している。住居覆土中の出土遺物は、土師器の細片あるいは小破片が殆どである。須恵器の量はわずかである。弥生土器が混じる。

須恵器(333・334・297・222)は何れも細片の資料であり、全形の推測が難しい。333・334は壠蓋である。333の口唇部内面に沈線が巡る。胎土は333・334がやや砂質である。器表は333外面が黒色を呈す他は、いずれも灰色である。332の外表面は、搔き目調整がくわえられている。

土師器壠304は細片の資料である。胎土に粗粒砂を多く含む。器表は荒れて、被熱したものか全体に赤化し、器表は橙色を呈す。土師器331は、壠40の崩落土中の出土で、口縁部の1/4の資料である。

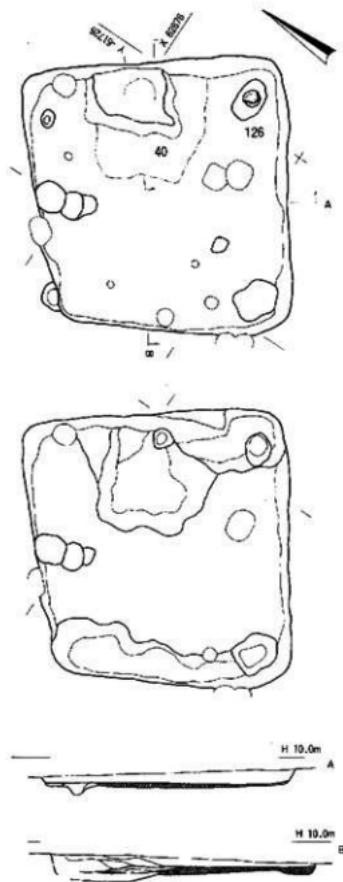


図18 竪穴住居3実測図(1/60)

器表はやや荒れ、内面には横方向の撫で調整がおこなわれている。胎土は砂味をもち、細孔がある。内面にぶい黄褐色、外面にぶい赤褐色を呈す。内面の口唇部より下位は、黒褐色の付着物が観察される。復原口径14.1cmを測る。土師器広口壺は、底部を欠く1/3程の資料である。やや砂質の胎土で、内外面とも暗赤褐色を呈す。口縁部内外面に横方向の撫で調整、体部外面には笠磨き調整をおこなう。復原口径12.7cmを測る。土師器把手付き壺は337は、竪40内の出土で、大破片資料

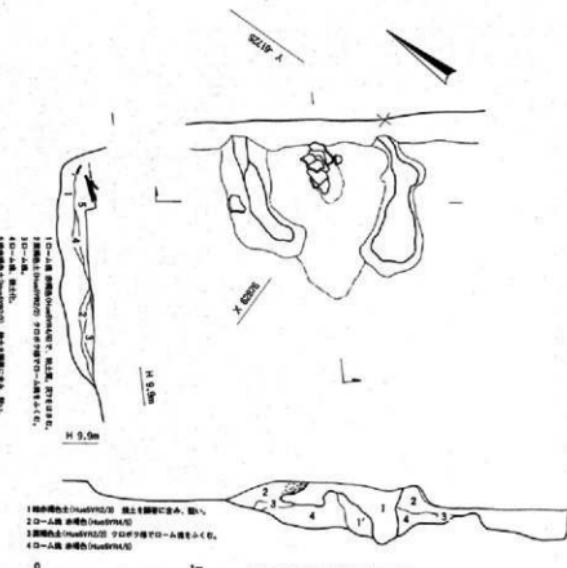


図19 竪40実測図(1/40)



図20 竪穴住居 3(北から)

である。胎土に粗砂を多く含む。外面は器表が剥落している。把手は、体部に穿孔して差し込み、接合しているものようである。被熱によるものか全体に赤化している。高さ18.0cm、口径18.8cmを復原できる。土師器96は、土壤126からの出土で、半ばを欠く。胎土に粗粒砂を多く含み、器表は被熱したものか赤化し、荒れている。内面には付着物がある。内面黒褐色、外面にぶい橙色を呈す。内面の全体に指押さえの圧痕が残る。外面は刷毛目調整後指押さえが加えられている。高さ110.0cm、口径部

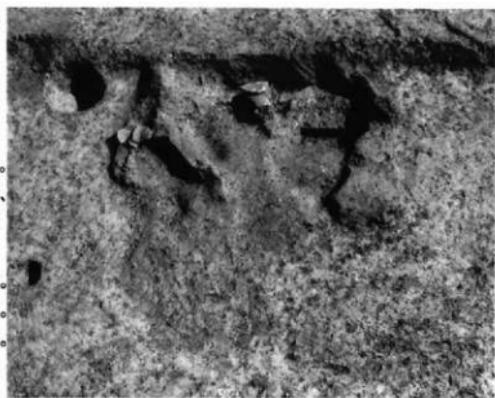


図21 蔵40(西から)

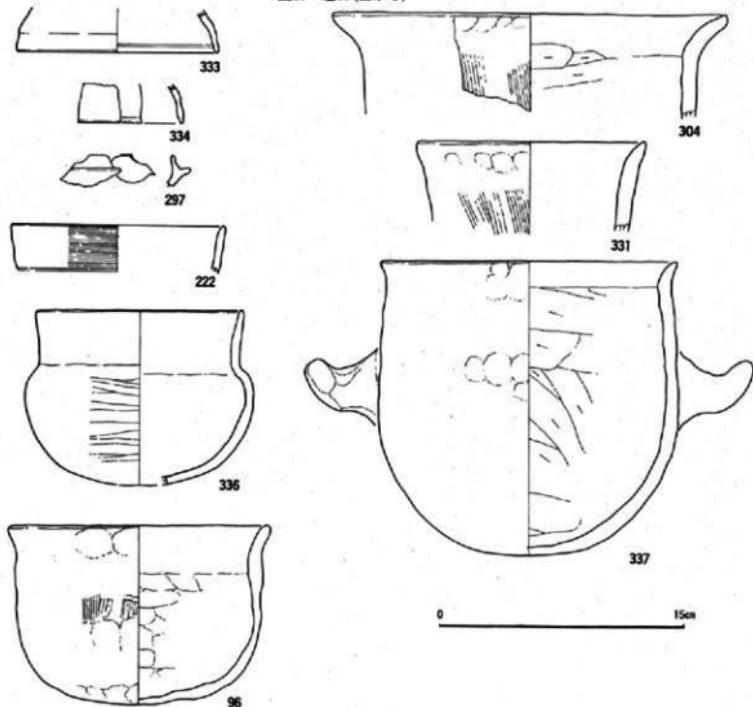


図22 堪穴住居3出土遺物実測図(1/4, 1/3)

径160.0cmを復原できる。口縁がやや開いて、鉢状を呈する資料である。

豎穴住居5

(図23~26)

調査区北西部で検出した。豎穴住居2と重複してそれよりも古い。隅丸方形の住居と推測されるが、北壁は豎穴住居2によって破壊され、西壁と南壁の一部以外は調査区外に位置している。床面の検出段階で、南壁に沿いやや幅の広い溝溝を確認した。この段階で柱痕跡1本が確認できる。他に1本住居2と重複破壊された位置で検出した。貼床がおこなわれており、それは際を幅0.7m、深さ0.1m弱程の浅い溝状に掘りくぼめて地山上で埋めるという手法をとっている。ために中央部の床面には及んでいない。いることが分かる。住居2の隅部により破壊

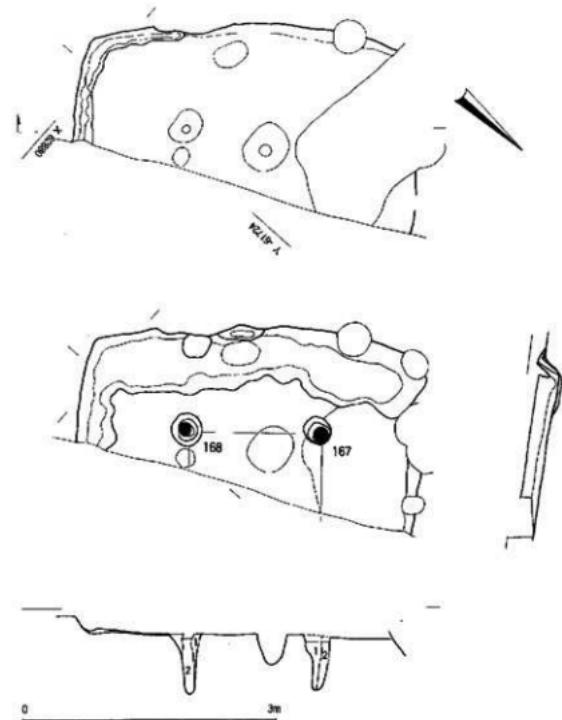


図23 豊穴住居5実測図(床面・縦型 1/60)

された、北壁の位置に竈が作り付けられていたことが、僅かに残る貼床部の観察から判断できる。柱穴は、やや漏斗状となり、その埋土断面では柱痕跡観察できる。住居の規模をみると、計測できる西壁の辺長2.5m、床面までの壁の高さ0.2m弱である。また、柱間は1.9mを測る。

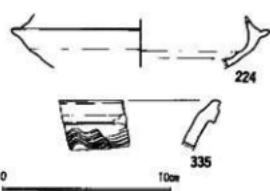


図24 豊穴住居5出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(図24) 遺物は、覆土中から極散漫に出土した。土師器・須恵器のいずれも細片資料である。その構成比は8.2程度である。

224は須恵器坏身の口縁部細片資料である。胎土は精良で内外面とも灰色を呈す。

335は須恵器壺の口縁部細片資料である。胎土に極少量粗粒砂を含み、器表は内外面とも灰色を呈す。口唇下の外面に波状の構造が施されている。



図25 塗穴住居5(床面 東から)



図26 塗穴住居5(模型 東から)

堅穴住居6(図27・29~31)

調査区西辺部で検出した。堅穴住居3と重複して、それよりも古い。堅穴住居3により、西壁を破壊されているが、隅丸の方形状を呈していたことがわかる。東壁で0.1m程の高さの遺存である。覆土は黒褐色土で一様である。東壁に沿い幅の広い壁溝を検出している。竈は北壁沿いにわずかなたかまりをもった粘土の分布となって残るのみである。地山土により貼床がおこなわれているが、それを除去した掘型は、住居中央部を土壤状に、壁際を溝状に一段深く掘り下げる手法を示している。さらに、竈部とみられる位置では、推定焚口部を浅い土壤状(遺構60)に、壁際を不整な小穴状に掘り下げているようにみえる。柱痕跡は

床面で一本を確認したが、

それ以外は、柱穴を、竈が崩落した粘土下と、重複する住居3に重なって下位の位置で検出した。柱穴は、断面が漏斗状を成すもの、底部が広がり逆台形状をなすものがある。柱痕跡はかなり傾斜をもっているようで、土層断面では一部しかわからないものがある。柱穴は平面状では平行四辺形状に配列し、その柱間隔は2.1m程である。住居の規模は、竈を通る軸線上で4.3mを測る。直交する方向の大きさは計測できないが、同じ位の値をとるようにも見える。

出土遺物(図28) 遺物は覆土中から散漫に出土したほかに、竈の一部と考える遺構60から同一個体の資料が小破片となって纏まって出土した。総量で大ボリ袋程の分量である。

338は須恵器环身口縁部の細片資料である。胎土は精良で、器表は受部以下が黒色であるほかは灰色、断面では灰褐色を呈すを呈す。

339は土師器で、口縁部

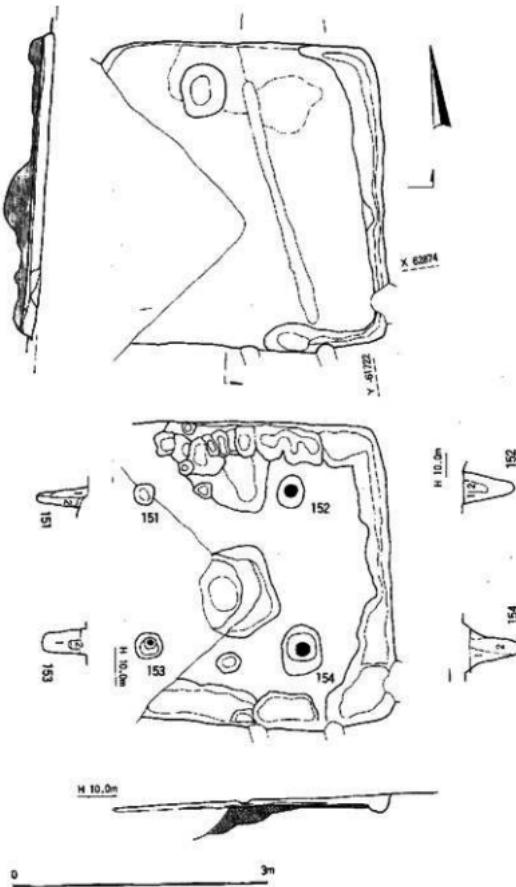


図27 堅穴住居6(床面・掘型 1/60)

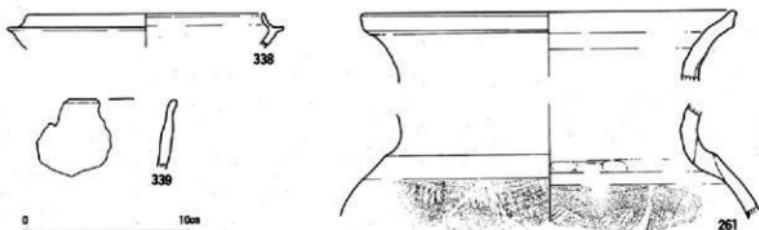


図28 堪穴住居6出土遺物(1/3)

の資料である。細片のため、もとの形状が判別できない。胎土に粗粒砂を含み、細孔がみられる。口縁部ではそれに沿う方向の撫で調整が、以下の内外面では縱方向のやはり撫で調整を行っている。内面にぶい赤褐色、外面灰黄褐色を呈す。同一個体とみえる細片の資料が多数出土したが、接合しない。

261は土師質の土器である。遺構60から出土した。上下と同一個体の異部分で接合はしない。口縁部から頸部までは回転を利用した撫で調整をおこない、以下は叩き目調整の痕跡が残っている。内面の頸部と体部との接合部には指押さえの圧痕が、以下の体部には撫で調整の痕跡が残る。刷毛目状の痕跡も残るが判然としない。復原口縁部径22.9cmを測る。



図29 堪穴住居6(床面 南から)



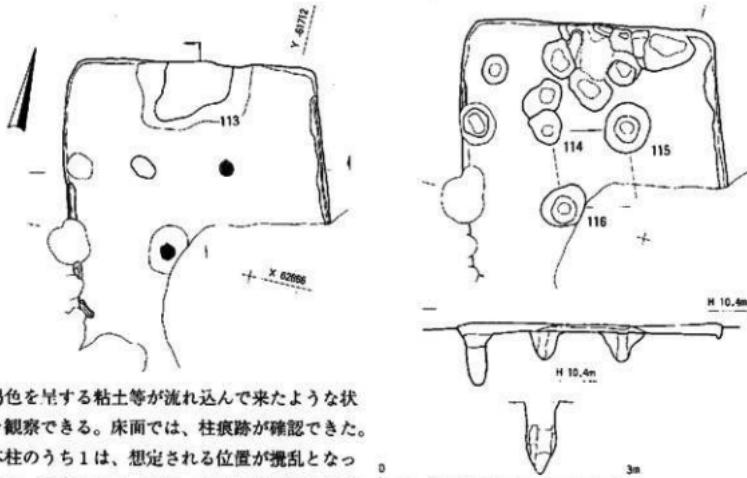
図30 竪穴住居 6 (掘型 北から)



図31 窓60(南から)

豊穴住居7(図32-33-35-37) 調査区中央部近くで検出した。隅丸方形状の豊穴住居である。南側で豊穴住居8、掘立柱建物9と重複する位置にあるが、構成の削平のため切り合ひ関係を確認することができなかった。また、擾乱により、南東隅部を中心とした部分1/3を失っている。

住居は、台地上の平坦地に位置することから削平が著しく、現状で最も程度の良い部分で、0.2m程、南壁は全く確認できていない。覆土は暗赤褐色で、竈113近くでは竈の方から地山土ブロック、鈍い



黄褐色を呈する粘土等が流れ込んで来たような状況を観察できる。床面では、柱痕跡が確認できた。

4本柱のうち1は、想定される位置が擾乱となつておらず、現存しない。西壁、東壁に沿い細かい壁溝を確認した。床には全体に貼床をされている。地

山上によるそれを除去した掘型の底面は、非常に不整で、小穴状の窪みが特に北半部に顕著である。

竈113は、住居北壁に作り付けられている。確認時には上部が崩落し、かつ削平を受けたために暗褐色土の高まりとして検出された。崩落土を除去すると、竈袖の基底部のみが遺存していることがわかった。燃焼部は不整な長方形形状を呈し、長さ0.6m、幅0.5mを測るが、底の焼土の広がりはそれより狭い、内部の壁を掘り飛ばしているかもしれない。焚口部とする部分は幅が0.4mでそれから前面に向かい暗褐色軟質で焼土粒、木炭を含んで層の広がりが認められた。灰層とするべきであろうか。貼床を除去すると袖部のみ地山が一段高く残されていることが分かった。この高まりに暗褐色土が載っている。暗褐色土は焼土塊、黄褐色粘土塊、土器片を顕著に含んでいる。また、竈の向かって右側に近接した壁際に不整な形状の土壙が検出された。竈部と同様の覆土を上部に、下部には軟質の地山土で埋まっている。竈部分の構築材と思われる部分を除去すると、地山面の複数箇

図32 豊穴住居7実測図(床面・掘削 1/60)

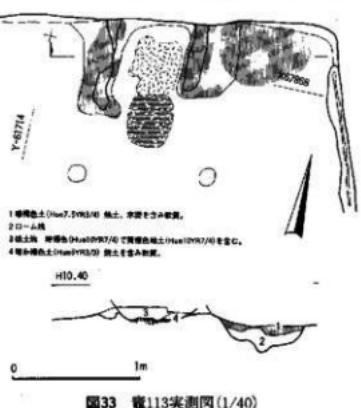


図33 竈113実測図(1/40)

所が不整な小穴状に掘り窪められてゐる事が分かった。

柱穴は、漏斗状、円錐状を呈し、土層断面でも柱痕跡が明瞭である。平面での配列をみると極端に歪で、欠ける一本をそれから推定される位置に置くと、菱形といった形状をとる。現存す

る柱間は、1.1m程で、竈焚口に極近接した位置となり、全体として他の竪穴住居と比べ、目だって柱が内方へ寄つたものと復原できる。

出土遺物 遺物は覆土中から散漫に出土した。土師器および須恵器の細片が殆どであり、総量で中ボリ袋程の分量となる。

須恵器233は、1/3が遺存する資料である。坏蓋とするが、頂部1/3まで範削り調整がおこなわれてゐる。また、「×」の刻線がある。頂部内面は、放射方向の撫で調整が残る。胎土に粗粒砂を含み、器表は灰色を呈す。

230は、石皿の破片であろうか。図上の上面が緩い窪みをもった擦り面となっている。他の部分に擦り面は無い。砂岩製でやや軟質である。

以上、弥生時代中期、古墳時代後期に属する竪穴住居について報告したが、べつに形状、時期の判然としない遺構185があり、以下に報告する。

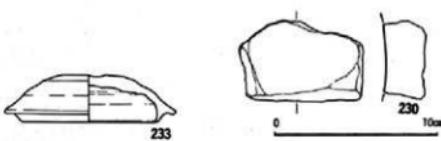


図34 竪穴住居7出土遺物実測図(1/3, 1/2)

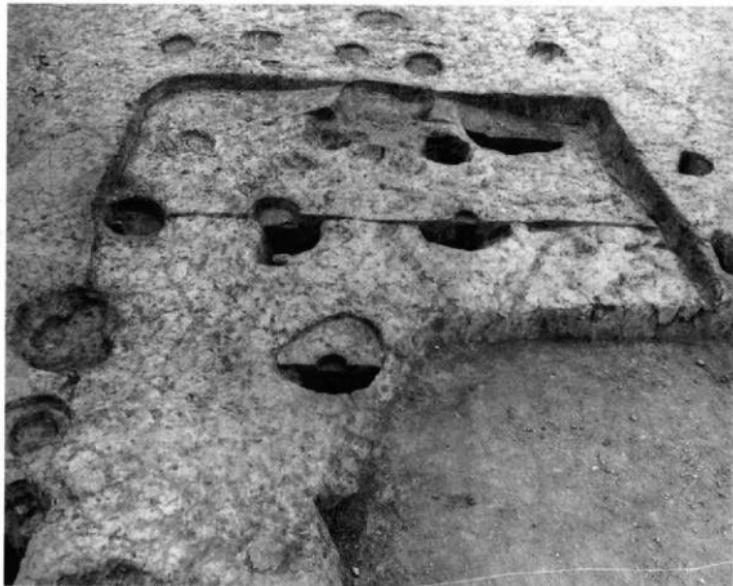


図35 竪穴住居(床面、貼床断面 南から)

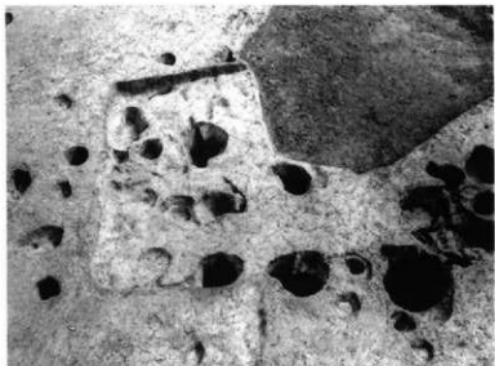


図36 壁穴住居7(掘壁 西から)



図37 壁113(南から)



図38 造構185(東から)

遺構185(図38・39) 他遺構とは離れて調査区東部分で検出した。擾乱の底に僅かに遺存していた遺構である。半ば以上は調査区外にあるとおもわれる。方形または長方形の隅部を検出している。南側では地山の傾斜により遺存していない。壁溝かと思われるような壁際の落ち込みが僅かにあるが、あるいはより小形の貯蔵穴のようなものである可能性もある。何分にも遺存状態が良くない。覆土は黒褐色土で、隅部の壁の高さ0.1m程度を測る。遺物の出土は無かった。

掘立柱建物90(図40~42)

調査区西半部南辺で検出した。一部の柱穴は調査区外となる。竪穴住居8、竪穴住居7と重複した位置にあるが、削平が著しいという条件の元で直接の切り合い関係は観察できなかった。

建物を構成する柱穴は、不整な円形状で、その径は0.7乃至0.8mの範囲にある。柱穴のうち、埋土を平面で観察する事で、柱痕跡を確認したとするものが7基中6基ある。また、埋土の断面の観察からは、6基について柱痕跡を確認できた。その径は何れも20乃至25cm程度を示している。柱穴埋土は、極暗赤褐色土、あるいは暗赤褐色土と地山ローム塊とで構成されている。

柱穴の配置は調査区内で確認できるのは、 2×2 間の純柱構造で、これに続く柱の可能性が無いでない。ただし、柱間隔をみると、後掲するとおり南北方向のそれが東西方向のそれより大きい。こ

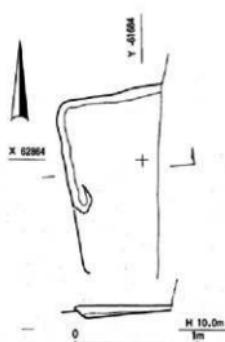


図39 遺構185実測図(1/40)



図40 掘立柱建物90(北から)

の関係からするかぎり、南側の調査区外へ延長する可能性は小さいといえよう。

柱痕跡間の距離を、柱痕跡の心眼間の距離で計測すると、東西方向で柱穴56-57が、1.50m、同57-58が1.48m、65-64が、1.56m、64-63(柱圧痕)が、1.56m、66-67が1.40mをそれぞれ測る。さらに南北方向では、柱穴65-64が1.64m、同66-64が1.62m、64-57が1.82m、67-63(柱圧痕)が1.62m、63(柱圧痕)-58が1.80mをそれぞれ測る。また、柱穴底部の標高をみると、ほぼ、9.4mから9.5mの範囲に入り、例外は1基のみであり、ある程度の規格性をみてとれよう。建物の方向は、建物の長軸となる南北の軸の方向は座標北に對して13度西へ振れている。また、座標北に對して真北は0度19分東へ振れていることか

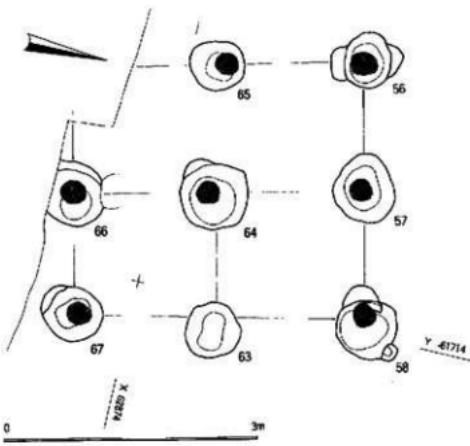
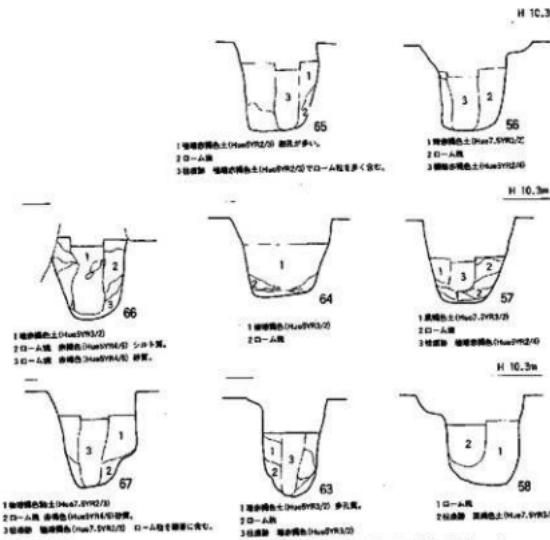


図41 挖立柱建物90実測図(1/60)



た存在である。

柱穴57出土遺物 256は須恵器壊身の口縁部細片資料である。

土は粒状性があり、僅かに砂粒も混じる。器表面は内外面とも灰白色である。

ら、建物90の南北軸は、真北に対し13度19分西へ振れることになる。

建物90の平面形は、南北に長軸をもつ長方形となり、少なくとも東西で3m、南北で3.5mの範囲を占めることとなる。

出土遺物(図43) 建物を構成する各柱穴から少量づつの遺物が出土している。弥生時代の竪穴住居8と重複する位置となるためか、弥生土器細片、刺片、石核の出土が注意される。その他土器はいずれも細片でかつ痛みが著しい。柱穴57出土の須恵器が唯一判然とし

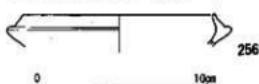


図43 挖立柱建物90出土遺物実測図(1/3)

掘立柱建物100(図44)

調査区西半部に位置する。調査後図上での検討で復原することができた。平面で1×2間の規模をもつ。調査区西辺部の縦斜面にかかり、小穴群が分布しているが、そのなかで際立って深いことで、他とは区別される。柱穴の平面形は不整な円形状を呈し、底面の深さは、標高9.3mを測るものが最も多いが、ほかに

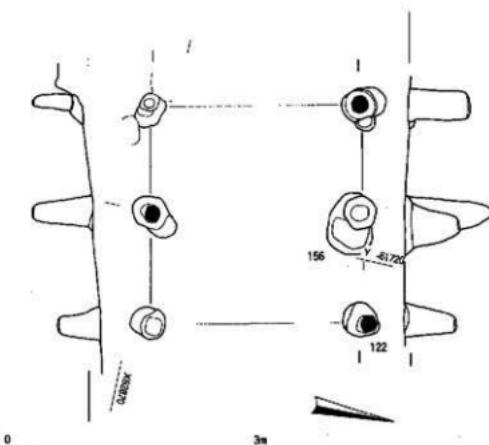


図44 掘立柱建物100実測図(1/60)

9.0mから9.6mまでのばらつきがある。柱間の距離は、平行方向で1.6m、梁行方向で3.1m程の規模である。結果として、長さ3.2m、幅3.1m以上の平面規模をもった建物となる。建物長軸のとる方位は座標北に対して、77度東に振れている。

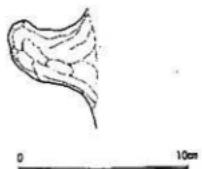


図45 掘立柱建物100出土遺物実測図(1/4)

出土遺物(図45) 半数の柱穴覆土から極少量の遺物が出土している。図示する以外は、何れも細片の土器資料である。144は土器器の把手付きの体部小破片である。口縁部、底部の状況とも不明である。瓶であろうか。胎土には粗粒砂を含み、内面の器表は浅黄色、外面は橙色を呈す。器表は荒れているが、内面に範削り調整が観察される。縦方向におこなわれるものである。

掘立柱建物110

(図46・47)

調査区の北辺部で検出した。調査時は2×3間の規模と考えていたが、図上での再検討により、東柱をもつ2×4間の規模を復原した。柱穴は、径が0.2m乃至

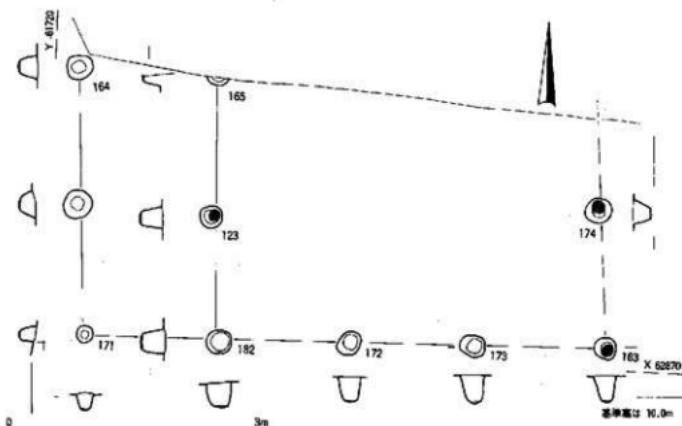


図46 掘立柱建物110実測図(1/60)



図47 挖立柱建物110(南から)

0.3mの不整な円形状を呈する。柱穴の配置は、桁行方向で、柱穴171-182で1.52m、同182-172で、1.52m、172-173で1.48m、173-183で1.54mをそれぞれ測る。また、梁行方向では、柱穴164-186で1.64m、186-171で、1.54m、123-182で1.50m、174-183で1.64mをそれぞれ測る。また、各柱穴の底面は地形の傾斜に沿って東に高く、西に低い。その間の比高は0.1m程度である。結果として、長さ6.4m、幅3.2m以上の平面規模をもった建物となる。また、その主軸の方位は、座標北から89度東へ振れている。

柱穴からは、極少量の土器が細片で出土している。弥生土器、土師器、須恵器がある。

土壤9(図48・50)

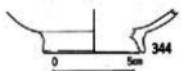


図49 土壇9出土遺物実測図(1/3)

調査区西辺部緩斜面で検出した。

円形状の土壤で、断面で壁の立ち

上がりが一段屈曲する漏斗状であることから、自然に埋没したものと見える。

覆土は暗褐色土で全体に一様である。径0.9m、深さ0.8mを測る。

出土遺物 覆土中からごく散漫に、小ボリ袋程の遺物が出土した。殆ど

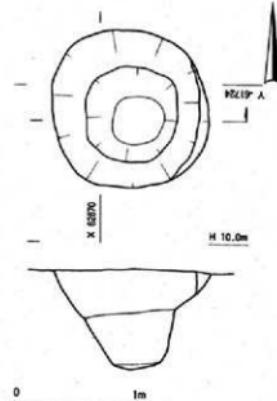


図48 土壇9実測図(1/40)

が弥生土器、土師器の細片資料であるなかで、土師器高台碗344の出土があった。底部細片の資料で、胎土には粗粒砂が混じる。被熱によるものか全体に赤化し、器表は剥落している。

他遺構出土遺物

以上に報告したほかの遺構からも遺物が出土している。いかに、そのうちの幾つかを掲げる。

土師器345は、遺構156の出土である。遺構156は掘立柱建物100を構成する柱穴と重複している。先後関係は不明確である。土師器345は、高环部1/3の資料である。胎土は粒状性がある。器表は剥落している。現状で内外面とも橙色を呈す。復原口径26.7cmを測る。

須恵器环身298は、不整な土壙55からの出土である。全体の1/2程の破片である。胎土は堅緻で器表は内外面とも灰色を呈す。体部の半ばまで回転を利用した箝削り調整をおこなう。底部内面には横向きの撫で調整がみられる。復原口径11.7cmを測る。

須恵器环蓋210は、竪穴住居4と重複した遺構の出土である。胎土に砂粒を含み、内面の器表はにぶい橙色、外面は灰黄色を呈す。頂部1/3程に回転を利用した箝削り調整が加えられている。頂部の内面には叩き目調整痕が残される。口径13.7cmを測る。

須恵器蓋283は、小穴83からの出土である。胎土に粗砂を含み、内外面とも灰色を呈す。1/2程の破片で、復原口径9.6cmを測る。

鉄斧1は遺構検出中の出土である。刃部の一端を欠き、錆彫れが著しい。全長10.1cmを測る。

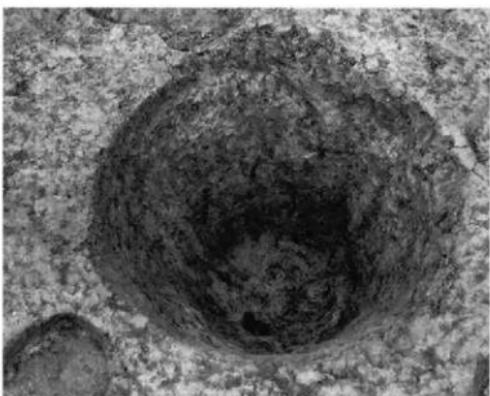


図50 土壙9(北から)

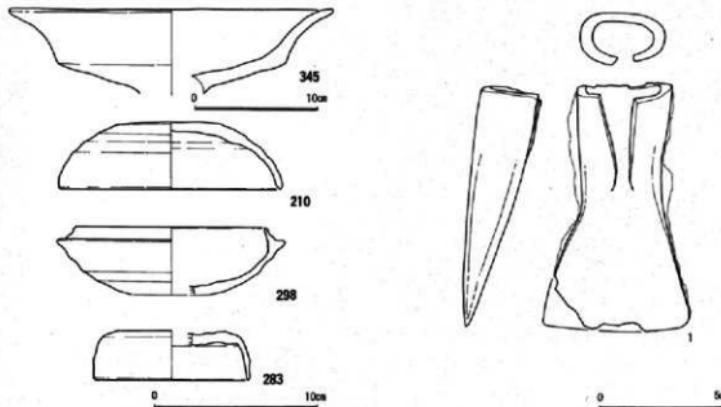


図51 土壙9出土遺物実測図(1/4, 1/3, 1/2)

4. おわりに

終わりに、有田第172次調査の成果と周辺調査の成果について触れてみたい。

遺構の各説に示したように、各遺構ともその遺存状態とも相まって遺物の量は極少ない。そのため明確な時期を示す資料に恵まれないが、次のような時期を考えることができよう。

弥生時代とする堅穴住居4、8は、前時代、時期の資料がより頗る存在としてあるが、細片資料として土器が出土しており、それから中期を考えることができよう。

隅丸方形で竪を作り付ける堅穴住居2、3、5、6、7も遺物量は少なく、かつ細片資料が多いが、古墳時代後期、須恵器等から6世紀後半に纏めることができよう。また、掘立柱建物90および100についても痕跡程度の遺物であるが、この時期に含めて考えられよう。

土壙9は、平安時代とできようか。

掘立柱建物110に関しては、遺物よりも、柱穴の規模、配列から出土遺物よりも新しい年代、平安時代、あるいはそれ以降中世を考えておく。

上記遺構、あるいは外遺構からは、より古い年代の資料が出土して、直接遺構が示す以外に周辺も含めて遺構、遺物の遺存が予想されるものがある。堅穴住居4からは縄文時代晩期の、同じく8からは縄文時代後期を考へることのできる資料が出土した。後者は旗跡程度の存在であるが、外地点遺跡では調査されており、既調査資料から分布を検討してみなければならないものかもしれない。今回こういった検討はおこなっておらず今後の課題としたい。

さて、視点をかえて近隣調査地点との関係をみてみる(図2)。近隣の調査では、表1に示すような遺構の出土があった。これらの地点の位置を、IH状を記録した地形図に投影してみると、まず、報告する172次地点と114次、15次地点は有田・小田部の台地に深く入り込んだ同じ谷地へ面した斜面に一部が係ることが分かる。172次地点、114次地点のそれぞれ東半部は、尾根線にかかる位置となる。同様にして、67次地点は、さらに北側の谷へ北面した斜面に一部がかかり、98次地点はいま述べた2者間の尾根線上に位置することとなる。11次地点、50次地点は、前者谷の谷頭のそれぞれ北側、南側に立地している。48次地点、80次地点は172次地点の東に接して、尾根線が分岐する位置で尾根線を隔てて南北の斜面に位置している。

以上のような位置関係にある調査地点に遺構の分布を重ね合わせてみる。弥生時代中期までの円形堅穴住居は、比較的粗い密度で、48次地点、80次地点、172次地点、114次地点、更に152次地点にまで広がっている。互いに他と重複することはない。172次地点に關係する時期として古墳時代後期の堅穴住居は、172次地点、114次地点に分布がみられる。特に172次地点では、2基づつが重複して2群をなすなど、濃い分布状態を示していると言えよう。掘立柱建物については、年代の詳細を言わなければ各地点に分布するが、172次地点からいふと、やはり地形上連続する114次地点との関係をもつて分布するようにみてとれる。また、本文中に触れたように谷へ向かう斜面の小穴群について、記載はないが、114次地点の小穴の分布に繋がるもののように見て取れる。以上、かつての工事による地下げによる改変を要素として検討する必要を残す尾根部の情況は置いておくとして、谷へ向かうやや斜面の部分での各時期の遺構分布を言うことができよう。

有田・小田部 第25集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第472集

1996年3月29日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社ミドリ印刷

福岡市博多区西月隈1丁目122-4